

中学生の親和欲求および対友人不安感情が 友人とのつきあい方に及ぼす影響

笠原 華葉・島谷 まき子

Friendship among junior high school students: the relation between need for affiliation and anxiety friendship

Hanayo KASAHARA and Makiko SHIMATANI

The present study examined the relation among need for affiliation, friendship anxiety, friendship, and satisfaction with friends. 216 junior high school students completed a questionnaire about these 4 aspects of friendship. Factor analysis revealed 2 anxiety friendship: "Hated anxiety" and "Isolation anxiety", and also revealed 4 friendship: "Deep involvement," "Non-involvement," "Enliven," and "Concern." Third year girls scored higher than boys in need for affiliation and "Deep involvement". The relation among the 4 aspects was analyzed by path analysis based on a model that need for affiliation toward friends influences anxiety friendship, and that anxiety friendship influences friendship, and that friendship influences satisfaction with friends. In boys and girls, need for affiliation had a direct effect on satisfaction, an indirect effect on satisfaction through "Deep involvement", and an indirect effect on "Non-involvement" through "Isolation anxiety". And "Hated anxiety" had a direct negative effect on satisfaction. The different results between boys and girls were found. The results were discussed in terms of the relation among need for affiliation, anxiety friendship, friendship, and satisfaction with friends.

Key words : junior high school students (中学生), need for affiliation (親和欲求), anxiety friendship (対友人不安感情), friendship (友人とのつきあい方), satisfaction with friends (友人関係満足感)

問 題

近年の中学生の友人関係は、同性の友人グループが拠点となっていることが特徴としてみられる(坂口, 1999)。しかし、友人グループは必ずしも安心感を抱けるものとは限らないこと(坂口, 1999)や、お互いの内面に踏み込まないように気を遣うこと(伊藤, 2002)が指摘されている。これらのことから、友人グループは友人関係の拠点として大切である一方で、表面的には関係をうまく築いているように見えても、内面的には仲間から外されることや嫌われることに対して不安感情を抱えていると推察される。このような複雑な中学生の友人グループの諸側面を検討するにあたって、1. 友

人関係における欲求、2. 友人に対する不安感情、3. 友人とのつきあい方、4. 友人関係満足感、5. 4側面の関連、6. 友人関係の性差と発達差について取り上げる。なお、本研究では、中学生の同性の友人グループについて扱う。

1. 友人関係における欲求

榎本(2000)は、中学生・高校生・大学生を対象として友人関係における欲求を検討し、友人と互いの個性を尊重する関係を望む「相互尊重欲求」、友人との親しい関係を望む「親和欲求」、友人と同じ行動や同じ趣味を望む「同調欲求」の3つの欲求があることを見出した。そして、「親和欲求」は、中学生・高校生・大学生で一貫して男

女ともに強くもっていることが明らかになった。親和欲求は友人に対して求める基本的な欲求であるため、友人関係の基礎となり、友人関係を支えている要素といえる(榎本, 2000)。このことから、親和欲求は、中学生にとっても基本的な欲求であり、友人関係と関連がみられると考えられる。そこで、本研究では、親和欲求を取り上げる。

2. 友人に対する不安感情

友人関係における不安感情に着目した研究は多くなされている。榎本(1999, 2000)は、中学生は友人関係を形成する際、友人を信頼しつつも不安な感情が背景にあることを明らかにした。そして、不安感情は、友人に対して肯定的な受容を望むがゆえに生じると指摘している。このことから、中学生は、友人関係を築く際に、友人と仲良くしたいと思うと同時に不安感情も感じていると考えられる。しかし、榎本(1999, 2000)は、どのような不安感情を感じているかについては明らかにしていない。

松田(2008)は、中学生・高校生を対象とした対友人不安感情と友人関係の関連を調査し、グループに対する不安である「不調和不安」「疎外不安」、友人に対する不安である「拒否不安」の3つの不安感情を見出した。そして、高校生では、対友人不安感情が高いと、深く関わることや楽しませる関わりが築きにくくなることを明らかにした。しかし、松田(2008)では、中学生の対友人不安感情と友人関係の関連は明らかになっていない。

3. 友人とのつきあい方

近年は、内面的な関わりを避け表面的なつきあい方をする傾向があることが指摘されている。このようなつきあい方として、松田(2008)の友人が嫌な思いをしないように気を遣う「気遣い」、友人を楽しませる「盛り上げ」、中園・野島(2003)の楽しくなるように意識している「広く・楽しく」、岡田(2002)の友人に気を遣う「気遣い」、一緒にいたり場を盛り上げる「群れ」が挙げられる。

同時に、内面的な関わりもしており、このようなつきあい方として、松田(2008)の友人に本音を話す「深い関わり」、吉岡(2001)の相手への信頼感を示す「自己開示・信頼」、相手への関心を

示す「深い関与・関心」、自分との共通性を示す「共通」、親しく仲が良いことを示す「親密」、お互いを高め合う「切磋琢磨」、中園・野島(2003)の友人と本音で関わろうとする「関係深化」、友人の評価を気にしたり友人をもっと知ろうとする「評価懸念・関心」が挙げられる。

一方で、友人とのつきあいそのものの関心が低いことも指摘されている。中園・野島(2003)は、他者への配慮の欠如や他者への関心の無さが友人関係の希薄化につながっていることを指摘し、友人を傷つけることに対する意識が希薄な「自己中心的」を見出している。また、岡田(2002)は、互いに距離を取って介入しない「不介入」を見出している。

しかし、松田(2008)や吉岡(2001)は、表面的な関わりや内面的な関わりに関する項目のみであり、友人への関心の低さに関する項目を捉えられていない。また、中園・野島(2003)や岡田(2002)は、大学生を対象としたものであるため、中学生の友人関係は捉えにくいと考えられる。これらのことから、本研究では、松田(2008)、吉岡(2001)および中園・野島(2003)、岡田(2002)を参考にし、中学生の友人とのつきあい方を捉える尺度を作成する。

4. 友人関係満足感

吉岡(2001)は、友人関係の理想と現実のズレと満足感の関連を検討し、ズレが大きいと満足感が低くなることを明らかにした。しかし、吉岡(2001)は、満足感の程度を問うただけであり、満足感を具体的に捉えていない。一方、加藤(2001)は、人間関係に関する満足感は、主観的に良好な状態や生活の質で捉えることができると考え、友人関係の満足度を友人関係に関する主観的な適応状態から捉える尺度を作成している。加藤(2001)の友人関係満足度尺度を用いることで、満足感の程度だけでなく、望んでいる友人関係を築けているかを捉えることができると考えられる。そこで、本研究では、加藤(2001)の友人関係満足度尺度を用いる。

5. 親和欲求・対友人不安感情・友人とのつきあい方・友人関係満足感の関連

これまで、友人関係をさまざまな側面から研究

したものは多くみられる。親和欲求と不安感情の関連をみた研究では、榎本 (2000) は、欲求面と感情面との関連を検討し、親和欲求は不安感情と強く結びつくことを明らかにしている。対友人不安感情と友人とのつきあい方の関連をみた研究では、榎本 (1999) は、「不安・懸念」が、親密で仲が良いことを確認するつきあい方である「親密確認活動」に影響していることを明らかにしている。松田 (2008) は、対友人不安感情が高いと、友人と深く関わることや楽しませる関わりが築きにくくなることを明らかにしている。また、対友人不安感情が低くても、自分の意志や個性を大事にするため、結果として友人との関わりを避けることを示唆している。友人とのつきあい方と友人関係満足感の関連をみた研究では、吉岡 (2007) は、友人関係満足感が高いと、友人関係において自分の言いたいことを大体言えていると感じており、満足感が低いと、友人関係への配慮や理想が極端であり、友人関係において無理している感じをもっていることを示唆している。友人関係における欲求と満足感の関連をみた研究では、塚本・濱口 (2003) は、親和傾向が高い者は、相手との深い親密な関係を築くために、友人から信頼されたり感謝されたりすることが多く、結果として友人関係満足感が高まることを示唆している。

また、榎本 (2000) は、中・高・大学生を対象として、友人関係を、感情的側面、欲求の側面、活動的側面の3つに分類し、それらの関係を検討している。その際、榎本 (2000) は、Buhrmester & Furman (1986) が提唱した、感情が欲求に影響を及ぼし、欲求が活動に影響を及ぼすというモデルを用いている。しかし、「不安・懸念」は、他人に肯定的受容を望むがゆえに生じる不安感情であること (榎本, 1999) や、親和欲求の主な内容である、楽しむことと仲間づきあいを望むことは、友人に対する最も基本的な欲求であること (榎本, 2000) から、不安感情が生じる前に、仲良くなりたいという親和欲求が存在するとも考えられる。

以上のように、友人関係の各側面の関連をみた研究は多くみられる。しかし、親和欲求、対友人不安感情、友人とのつきあい方、友人関係満足感の4側面の関連をみた研究はみられない。そこで、本研究では、これらの友人関係の4側面の関

連を検討する。

6. 友人関係の性差と発達差

中学生の友人関係には性差があることが明らかになっている。男子は、自分に自信をもち友人と自分は異なる存在であると認識し、女子は、友人と共感・共有しあい、お互いがひとつになるような関係を望む (落合・佐藤, 1996)。また、男子は活動を共有することが中心で、女子は親密な関係を作ることが中心である (榎本, 1999)。女子は閉鎖的で親密性の高いグループであるために、問題が深刻化しやすい (坂口, 1999)。また、不安感情と友人に対する親和欲求は、女子の方が男子よりも高い (榎本, 1999, 2000)。友人とのつきあい方において、本音を話すつきあいをする「深い関わり」は、女子の方が男子よりも多い (松田, 2008)。これらのことから、中学生の友人関係を検討するにあたっては、性差をみる必要があると考えられる。

青年期の友人関係の発達差については、中学生・高校生・大学生の比較によって、中学生から高校生にかけての発達的变化があることが明らかになっている (榎本, 1999, 2000; 松田, 2008)。しかし、中学生の学年ごとの検討はなされていない。一方、小野・戸田 (2002) は、中学生の各学年の友人関係の活動面および感情面の発達的变化を検討した結果、男女とも、中学2年生に質的变化がみられ、3年生に至って親密な関係を築いていることが明らかになった。これらのことから、中学生の友人関係の学年による発達差を検討する必要があると考えられる。

目 的

以上のことから、本研究では、第1に、中学生の同性友人グループにおける、親和欲求、対友人不安感情、友人とのつきあい方、友人関係満足感の4側面の関連について検討する。検討にあたって、親和欲求が対友人不安感情に影響を及ぼし、対友人不安感情が友人とのつきあい方に影響を及ぼし、友人とのつきあい方が友人関係満足感に影響を及ぼすという友人関係モデル (Figure 1) を新たに仮定し、検証する。第2に、友人関係モデルを構成する各側面の性差と発達差について検討する。

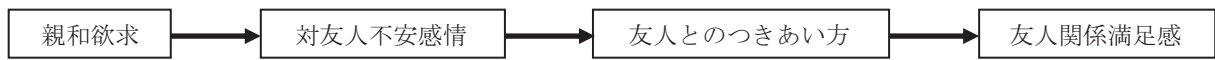


Figure 1 友人関係モデル

仮説

1. 女子は男子よりも親和欲求が高いだろう。
2. 女子は男子よりも対友人不安感情が高いだろう。
3. 友人とのつきあい方のうち、「深い関わり」のような本音を出す内面的なつきあい方は、女子の方が男子よりも多いだろう。
4. 親和欲求は対友人不安感情を高めるだろう。
5. 対友人不安感情は、「不介入」のような友人との距離をとったつきあい方を高めるだろう。

方法

1. 対象者

A県内の公立中学校1～3年生279名。回収数は216名（1年生56名／男子28名、女子28名、2年生78名／男子36名、女子42名、3年生82名／男子45名、女子37名）。回収率は77.42%であった。

2. 調査時期と手続き

調査時期は2010年7月下旬であった。質問紙は調査を依頼した中学校の各クラスにおいて担任教諭を通じて配布し、一斉に回答してもらった。その際、回答するかどうかは自由であること、回答が他人に知られたり、個人が特定されたりするようなことはないということをフェイスシートで説明した。回答後、担任教諭によってその場で回収してもらった。

3. 質問紙の構成

①フェイスシート

学年・性別を尋ねた。

②親和欲求の測定

榎本（2000）の友人関係の欲求の側面尺度より親和欲求の項目、全9項目を用いた。

③対友人不安感情の測定

松田（2008）の対友人不安感情尺度（中学生

版）、全18項目を用いた。18項目は、グループの和を乱すことを恐れる「不調和不安」（項目例：友達に秘密にしていることがあると仲良しじゃないと思われそうでこわい）、グループからはみ出してしまうことを恐れる「疎外不安」（項目例：仲間外れにされたくない）、友人から拒否されてしまうことを恐れる「拒否不安」（項目例：話しかけるときちんと返事をしてくれないかと思ってしまう）の3因子によって構成されている。

④友人とのつきあい方の測定

岡田（2002）の友人関係尺度、中園・野島（2003）の友人関係への態度に関する尺度、松田（2008）の友人関係尺度、吉岡（2001）の友人関係測定尺度の4尺度の各因子を、類似する因子同士に分類し直し、友人に対して気を遣う群、友人と親密に関わる群、友人と一緒にいる群の3群にまとめた。そして各群について、4尺度に共通する同じような意味をもつ項目を取り上げた。さらに、友人と関わらないつきあい方として、岡田（2002）の不介入因子、中園・野島（2003）の自己中心的因子の項目を加え、全18項目の尺度を作成した。

⑤友人関係満足感の測定

加藤（2001）友人関係満足感尺度、全6項目を用いた。

なお、②③④⑤については、質問項目の中の友達とは最も親しい同性の友人グループを指すと教示したうえで、「1：まったく思わない」「2：あまり思わない」「3：少し思う」「4：とてもよく思う」の4件法で回答を求めた。

結果

1. 親和欲求尺度について

親和欲求尺度全9項目の1項目あたりの平均値（標準偏差値）を算出したところ、全体は3.21（4.65）、男子は3.10（4.62）、女子は3.32（4.48）であり、「3：少し思う」を上回っていた。

親和欲求の性差および発達差の検討を行うために、性別（2水準）×学年（3水準）の2要因の分

散分析を行った。その結果、性別と学年の交互作用は有意であった ($F(2,216) = 3.24, p < .05$)。性別の単純主効果を検定した結果、1年生 ($F(1,210) = .63, n.s.$)、2年生 ($F(1,210) = .58, n.s.$) では性差はなかったが、3年生では女子の方が男子よりも有意に高かった ($F(1,210) = 16.69, p < .01$)。また、学年の単純主効果は、男子は有意ではなかった ($F(2,210) = 1.01, n.s.$) が女子では有意 ($F(2,210) = 3.72, p < .05$) で、多重比較 (Bonferroni法) の結果、女子では2年生よりも3年生が有意に高かった ($Mse = 1.01, p < .05$)。

2. 対友人不安感情尺度について

対友人不安感情尺度18項目について最尤法・Promax回転による因子分析を行った結果、2因子15項目が抽出された (Table 1)。

第I因子は8項目で構成されており、友人にきらわれるのではないかと不安に関する項目が高い負荷量を示していたため、「きらわれ不安」と命名した。第II因子は7項目で構成されており、友人から孤立することに関する項目が高い負荷量を示していたため、「孤立不安」と命名した。

対友人不安感情尺度全15項目および各因子の

1項目あたりの平均値 (標準偏差値) を算出した。対友人不安感情尺度は、全体は3.21 (4.65)、男子は3.10 (4.62)、女子は3.32 (4.48) であり、「3：少し思う」を上回っていた。「きらわれ不安」は、全体は2.57 (5.44)、男子は2.51 (5.28)、女子は2.62 (5.59) であり、「2：あまり思わない」と「3：少し思う」の中間の値だった。「孤立不安」は、全体は3.08 (5.42)、男子は3.08 (5.15)、女子は3.14 (5.42) であり、「3：少し思う」を上回っていた。

対友人不安感情の性差および発達差の検討を行うために、対友人不安感情尺度の因子ごとに性別 (2水準) × 学年 (3水準) の2要因の分散分析を行った。その結果、「きらわれ不安」因子は、性別と学年の交互作用は有意ではなく ($F(2,216) = 1.29, n.s.$)、性別 ($F(1,216) = 2.14, n.s.$) および学年 ($F(2,216) = .05, n.s.$) の主効果も有意ではなかった。「孤立不安」因子は、性別と学年の交互作用は有意ではなく ($F(2,216) = .20, n.s.$)、性別 ($F(1,216) = 1.86, n.s.$) および学年 ($F(2,216) = 2.65, n.s.$) の主効果も有意ではなかった。以上のことから、「きらわれ不安」因子と「孤立不安」因子は、性差と発達差はないといえる。

Table 1 対友人不安感情尺度の因子分析：Promax回転後の因子負荷量

項目内容	I	II
I. 「きらわれ不安」 $\alpha = .84$		
長時間友達の傍にいと自分の嫌な面を知られるかもしれないと不安になる	.74	-.18
友達と一緒に盛り上がっていないと陰口を言われてしまう気がしてこわい	.71	.08
自分が楽しいことでも、友達は楽しくないかもしれないと不安になる	.65	-.04
自分の本音をさらけ出しても、真剣に答えてもらえない気がする	.65	-.10
連絡を取る時、友達にうっとうしいと思われぬか気になる	.64	.05
友達に秘密にしていることがあると仲良しじゃないと思われてしまいそうでこわい	.51	.16
話しかけるとき、ちゃんと返事をしてくれないかもと不安になる	.50	.21
遊びに誘うとき、断られるかもしれないと気になる	.43	.09
II. 「孤立不安」 $\alpha = .84$		
できるだけ敵は作りたくない	-.23	.84
みんなと違うことはしたくない	-.10	.79
友達との話題についていけなくなるのはいや	.09	.65
仲間外れにされたくない	.02	.57
でしゃばりすぎると友達の反感をかうと思う	.14	.55
誰からも嫌われたくない	.12	.55
どんなときでも相手の機嫌は損ねたくない	.21	.48
因子間相関	I	II
	I	-.59
	II	.59

3. 友人とのつきあい方尺度について

友人とのつきあい方尺度18項目について最尤法・Promax回転による因子分析を行った結果、4因子11項目が抽出された (Table 2)。

第I因子は、松田 (2008) の「深い関わり」因子3項目が高い負荷量を示していたため、「深い関わり」と命名した。第II因子は、岡田 (2002) の「不介入」因子3項目が高い負荷量を示していたため、「不介入」と命名した。第III因子は、松田 (2008) の「盛り上げ」因子2項目が高い負荷量を示していたため、「盛り上げ」と命名した。第IV因子は、友達に対する気遣いに関する項目が高い負荷量を示していたため、「気遣い」と命名した。

友人とのつきあい方尺度の因子ごとに1項目あたりの平均値 (標準偏差値) を算出した。「深い関わり」は、全体は2.77 (2.33)、男子は2.56 (2.19)、女子は2.98 (2.31) であった。「不介入」は、全体は2.48 (1.97)、男子は2.53 (2.11)、女子は2.44 (1.81) であった。「盛り上げ」は、全体は2.76 (1.54)、男子は2.73 (1.60)、女子は1.85 (1.48) であった。「気遣い」は、全体は2.94 (1.88)、男子は2.91 (2.02)、女子は2.96 (1.73) であった。いずれも

「3：少し思う」を下回っていた。

友人とのつきあい方の性差および発達差の検討を行うために、友人とのつきあい方尺度の因子ごとに性別 (2水準) × 学年 (3水準) の2要因の分散分析を行った。その結果、「深い関わり」因子は、性別と学年の交互作用が有意であった ($F(2,216) = 3.27, p < .05$)。性別の単純主効果を検定した結果、1年生 ($F(1,210) = .96, n.s.$)、2年生 ($F(1,210) = 2.39, n.s.$) では性差はなかったが、3年生では女子の方が男子よりも有意に高かった ($F(1,210) = 21.55, p < .01$)。また、学年の単純主効果は、男子では有意ではなかった ($F(2,210) = 1.54, n.s.$) が女子では有意 ($F(2,216) = 7.69, p < .01$) で、多重比較 (Bonferroni法) の結果、女子では1年生より3年生が有意に高かった ($Mse = .546, p < .05$)。「不介入」因子は、性別と学年の交互作用は有意ではなく ($F(2,216) = 1.45, n.s.$)、性別 ($F(1,216) = .35, n.s.$) および学年 ($F(2,216) = .77, n.s.$) の主効果も有意ではなかった。「盛り上げ」因子は、性別と学年の交互作用は有意ではなく ($F(2,216) = .51, n.s.$)、性別 ($F(1,216) = .14, n.s.$) および学年 ($F(2,216) = 1.88, n.s.$) の主効果

Table 2 友人とのつきあい方尺度の因子分析：Promax回転後の因子負荷量

項目内容	I	II	III	IV
I 「深い関わり」 $\alpha = .73$				
友達に本当の気持ちを打ち明ける	.73	.01	.11	-.07
友達に悩みごとを相談する	.66	-.21	-.02	.06
友達と真剣な内容の話をする	.66	.13	.07	-.03
II 「不介入」 $\alpha = .68$				
お互いの領域にふみこまない	.00	.72	.00	.04
お互いのプライバシーには入らない	-.00	.66	-.02	-.07
友達の言う事に口をはさまない	-.02	.49	.04	.11
III 「盛り上げ」 $\alpha = .71$				
友達に冗談を言って笑わせる	.09	.00	.72	.03
ウケるようなことをよくする	.06	.05	.71	-.03
IV 「気遣い」 $\alpha = .73$				
友達といるとき楽しい雰囲気になるように気をつかう	-.11	-.06	.27	.70
友達の考えていることに気をつかう	.26	.10	-.25	.60
友達に甘えすぎない	-.10	.06	.00	.60
因子間相関				
I	-	-.00	.35	.23
II		-	.09	.51
III			-	.35
IV				-

も有意ではなかった。「気遣い」因子は、性別と学年の交互作用は有意ではなく ($F(2,216) = .94, n.s.$)、性別 ($F(1,216) = .60, n.s.$) および学年 ($F(2,216) = .12, n.s.$) の主効果も有意ではなかった。以上のことから、「不介入」「盛り上げ」「気遣い」の各因子は、性差と発達差はないといえる。

4. 友人関係満足感尺度について

友人関係満足感尺度全6項目の1項目あたりの平均値(標準偏差)を算出したところ、全体は2.80(3.57)、男子は2.72(3.56)、女子は2.88(3.52)であり、「3:少し思う」を下回っていた。

友人関係満足感の性差および発達差の検討を行うために、性別(2水準)×学年(3水準)の2要因の分散分析を行った。その結果、性別と学年の交互作用は有意ではなく ($F(2,216) = .56, n.s.$)、性別 ($F(1,216) = 3.84, n.s.$) および学年 ($F(2,216) = 1.76, n.s.$) の主効果も有意ではなかった。以上のことから、友人関係満足感は、性差と発達差はないといえる。

5. 親和欲求・対友人不安感情・友人とのつきあい方・友人関係満足感との関連

友人関係モデル (Figure 1) を検証するため、共分散構造分析によるパス解析を行った (Figure 2, Figure 3)。なお、女子は共感や親密さ

を重視する、男子は活動共有を中心とするという友人関係の特徴の構造を明らかにするため、男女別に検討した。適合度指標は、男子は $GFI = .711, AGFI = .499, RMSEA = .174, AIC = 463.803$ であり、女子は $GFI = .743, AGFI = .449, RMSEA = .183, AIC = 438.944$ であった。いずれの場合も適合度は低いが、友人関係モデルの検証のため、モデルを採用した。

男女ともに、「親和欲求」から「友人関係満足感」の直接効果、「親和欲求」から「深い関わり」を介した「友人関係満足感」への間接効果がみられた。また、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「不介入」への間接効果、「きらわれ不安」から「友人関係満足感」への負の直接効果がみられた。また、「親和欲求」から「孤立不安」への影響はみられたが「きらわれ不安」への影響はみられなかった。

男女別では、男子では、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「気遣い」への間接効果がみられた。また、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「友人関係満足感」への間接効果もみられた。女子では、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「盛り上げ」への負の間接効果がみられた。また、対友人不安感情を介さずに、「親和欲求」から「盛り上げ」を介した「友人関係満足感」への間接効果がみられた。また「きらわれ不

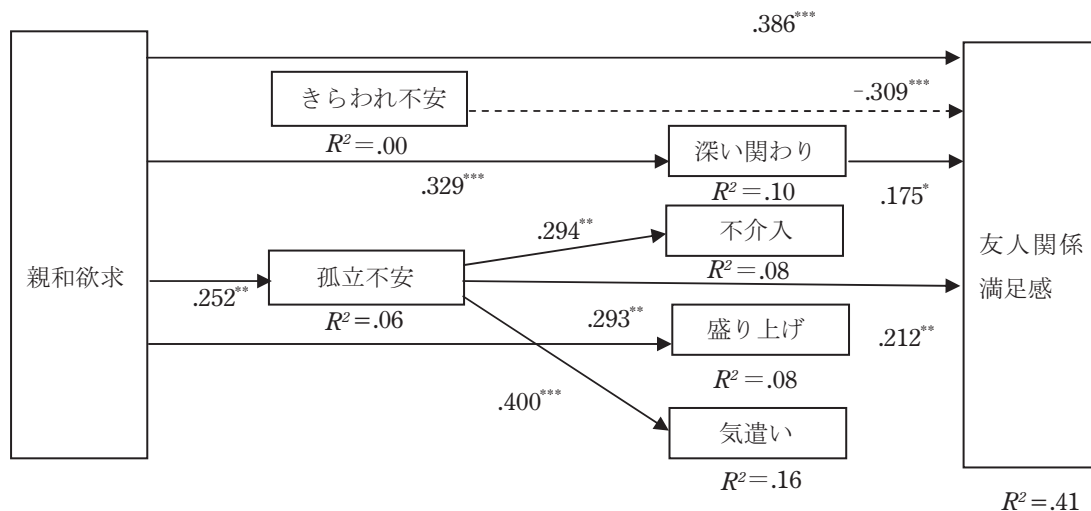


Figure 2 友人関係モデルのパス・ダイアグラム (男子)

注) 実線のパスは正の影響、点線のパスは負の影響を示す。5%水準に達しないパスは省略した。

$\chi^2 = 219.068, df = 38, p < .000$ $GFI = .818, AGFI = .655$ $RMSEA = .149$ * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

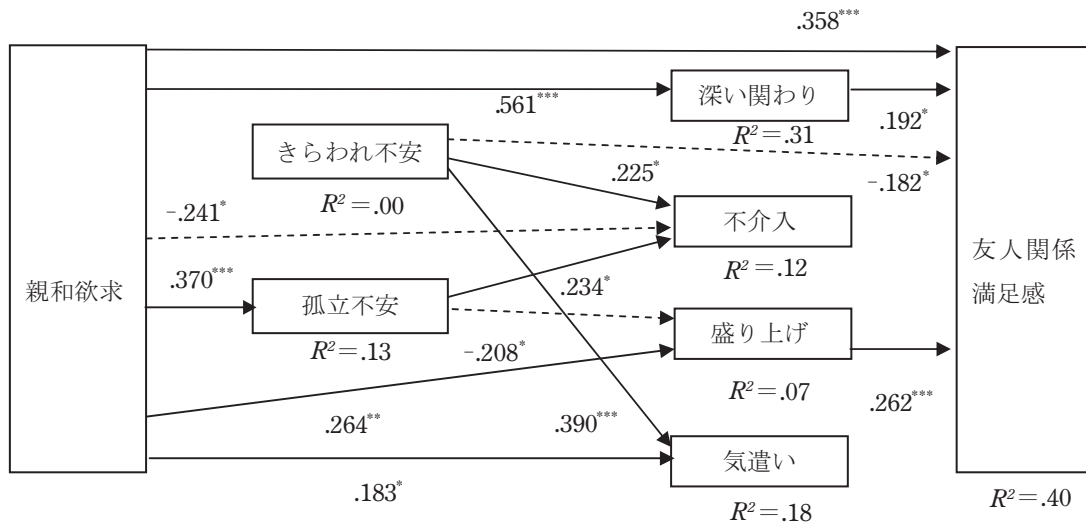


Figure 3 友人関係モデルのパス・ダイアグラム (女子)

注) 実線のパスは正の影響、点線のパスは負の影響を示す。5%水準に達しないパスは省略した。

$\chi^2=194.059, df=32, p<.000$ GFI=.834, AGFI=.627 RMSEA=.154 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

安」から「不介入」と「気遣い」への直接効果がみられた。このような「きらわれ不安」から「友人とのつきあい方」へのパスは男子ではみられなかった。

考察

親和欲求尺度得点の平均値と対友人不安感情尺度得点の平均値はともに3.21であり、中学生は、友人に対して親和欲求と不安感情を両方持っていることが明らかとなった。この結果は、榎本(2000)の研究と合致している。親和欲求は、1・2年生では性差はないが、3年生では女子が男子よりも有意に高く、仮説1.「女子は男子よりも親和欲求が高いだろう」は、部分的に支持された。対友人不安感情尺度の因子分析の結果、「きらわれ不安」「孤立不安」の2因子が抽出された。「きらわれ不安」「孤立不安」とともに性差はみられず、仮説2.「女子は男子よりも対友人不安感情が高い」は支持されなかった。松田(2008)は、対友人不安感情は、個人内の特性的な不安の感じやすさの特徴が大きいと指摘している。したがって、対友人不安感情は、個人差によって強く規定されているために、性差がみられなかったと考えられる。

友人とのつきあい方尺度の因子分析の結果、

「深い関わり」「不介入」「盛り上げ」「気遣い」の4因子が抽出された。「深い関わり」は、3年生で女子が男子よりも有意に高く、女子が男子よりも親密なつきあいをすることが示唆され、仮説3.「『深い関わり』のような本音を出す内面的なつきあい方は、女子の方が男子よりも多い」は部分的に支持された。友人関係満足感尺度得点の平均値は2.80で、中学生の友人関係満足度はそれほど高くないことが明らかとなった。また、性差および発達差はなかった。塚本・濱口(2003)は、友人関係満足感は男子よりも女子の方が高いことを明らかにしており、本研究は異なる結果となった。塚本・濱口(2003)は、友人関係満足感を“どう思っているか”と問うて具体的に捉えているのに対し、本研究では友人関係満足感を十分に捉えきれていないのかもしれない。今後は、個人の指標に焦点をあて、友人関係満足感をさらに具体的に捉える必要があるだろう。

親和欲求・対友人不安感情・友人とのつきあい方・友人関係満足感との関連では、男女ともに、「親和欲求」から「友人関係満足感」への直接効果がみられた。仲良くなりたいという気持ち自体が友人関係満足感を高めているといえる。また、「親和欲求」から「深い関わり」を介した「友人関係満足感」への間接効果がみられた。対友人不安感情に関係なく、親和欲求に動機づけられて

「深い関わり」をもつことができると、友人関係満足感が高まるといえる。また、「親和欲求」から「孤立不安」への影響はみられたが「きらわれ不安」への影響はみられず、「親和欲求」と関連する対友人不安感情は、「きらわれ不安」ではなく「孤立不安」であることが明らかとなった。「きらわれ不安」は、友人関係満足感への負の直接効果があり、「親和欲求」や友人とのつきあい方と関係なく、友人関係満足感を低めることが明らかとなった。一方、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「不介入」への間接効果がみられ、仮説4.「親和欲求は対友人不安感情を高める」と、仮説5.「対友人不安感情は、『不介入』のような友人との距離をとったつきあい方を高める」は、部分的に支持された。男女ともに、仲良くなりたいという気持ちは、孤立に対する不安を高め、友人と距離を置く「不介入」のつきあいをすることが明らかになった。「不介入」は友達に関して無関心であるつきあい方なのではなく、仲良くしたいという思いから生じるつきあい方であるといえる。

男子と女子では、「きらわれ不安」から「友人とのつきあい方」への影響が異なっていた。男子では、「きらわれ不安」から「友人とのつきあい方」への影響がみられなかったが、女子では、「きらわれ不安」から「不介入」と「気遣い」への直接効果がみられた。また、男子では、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「気遣い」への間接効果と、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「友人関係満足感」への間接効果がみられた。男子は、「孤立不安」があると、まわりに気を遣うつきあい方をするといえる。一方で、「孤立不安」が友人とのつきあい方を介さずに、直接「友人関係満足感」を高めていた。「孤立不安」があっても友人とのつきあいにおいて何もしないことが、相互に傷つき合うことがなく、友人関係を良好に保てていると考えられる。女子では、「親和欲求」から「孤立不安」を介した「盛り上げ」への負の間接効果がみられ、一方、対友人不安感情を介さず、「親和欲求」から「盛り上げ」を介した「友人関係満足感」への間接効果もみられた。女子は対友人不安感情に関わりなく、仲良くなりたい気持ちから場を盛り上げ満足感を得るが、一方、「孤立不安」があると、他人と異なる

こと（「盛り上げ」）をして周りから浮くことを避けるといえる。また、「きらわれ不安」から「不介入」と「気遣い」への直接効果がみられた。女子は、きらわれ不安をもつと、距離を置いたり、友達に対して気を遣うことで友人関係を良好に保とうとすると考えられる。

以上のように、女子は「きらわれ不安」と「孤立不安」の両方から友人とのつきあい方への影響がみられたが、男子は、「孤立不安」からのみ友人とのつきあい方への影響がみられた。「きらわれ不安」は友人との関係における内面的な不安であり、「孤立不安」は周りから浮くことへの不安であると捉えられる。したがって、この女子と男子の違いは、女子は、友人と理解・共感・共有しあう関係を望み（落合・佐藤, 1996）、親密的な関係をつくることが中心（榎本, 1999）であり、男子は、友人と自分は異なる存在であると認識し（落合・佐藤, 1999）、活動を共有することが中心（榎本, 1999）であるという、女子と男子の友人関係のあり方の特徴を反映していると考えられる。

今後の課題としては、友人関係のありかたを、対友人不安感情と友人とのつきあい方の組み合わせによってタイプ分けし、タイプ別に検討を加える必要があるだろう。

引用・参考文献

- Buhmester, D., & Furman, W. (1986). The changing functions of friends in childhood: A neo-Sillivianian perspective. In V.J. Derlega & B.A. Winstead (Eds), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag. pp.43-62.
- 伊藤美奈子 (2002). 不登校気分の背景にある休み時間イメージと学校適応、親友とグループの有無. *お茶の水大学人文科学紀要*, **55**, 275-286.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. *教育心理学研究*, **47**, 180-190.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. *教育心理学研究*, **48**, 444-453.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友人とのつきあい方の発達的变化. *教育心理学*

- 研究, 44, 55-65.
- 岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察. 性格心理学研究, 10, 69-84.
- 小野智希・戸田須恵子 (2002). 中学生の友人関係に関する研究 —活動的側面と感情的側面からの一考察—. 北海道教育大学紀要 (教育科学), 53, 1-12.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証. 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 坂口里佳 (1999). 「グループ化」とその行方. 青少年問題, 46, pp.16-21.
- 塚本貴文・濱口佳和 (2003). 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響 —中学生の場合—. 発達臨床心理学研究, 15, 45-55.
- 中園尚武・野島一彦 (2003). 現代大学生における友人関係への態度に関する研究 —友人関係に対する「無関心」に注目して—. 九州大学心理学研究, 4, 323-334.
- 松田常美 (2008). 青年期における理想の友人関係と対友人不安感情が現実の友人関係に及ぼす影響. 甲南女子大学大学院論集. 人間科学研究編, 6, 49-65.
- 吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感. 青年心理学研究, 13, 13-30.
- 吉岡和子 (2007). 友人関係における“自己の存在をめぐる葛藤”に関する研究. 九州大学心理学研究, 8, 195-200.

かさはら はなよ (昭和女子大学生活心理研究所)
しまたに まきこ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)